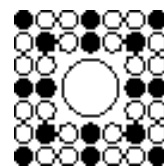


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 17

June 30, 2002



会長就任のご挨拶

British Council Japan Association

会長 瀬川 彰久



この度、平孝臣前会長の後任として BCJA 会長に指名され、就任いたしました。非力ではありますが、精一杯この大役に取り組んでいきたい所存です。なにとぞよろしくお願ひ申し上げます。

ご存知のように、今年はエリザベス女王が 1952 年に即位されてから 50 周年にあたり、英国およ

び英国連邦では各地で祝賀行事が催されています（詳細は <http://www.uknow.or.jp> に紹介されています）。わが BCJA も、1952 年に第一回の BC Scholars が渡英しており、この意味で本年 50 周年を迎えました。現在 900 名近い方々が本会に登録されていますが、会員の皆様は、理系・文系・芸術系など幅広い分野で成功をおさめられ、社会の第一線で活躍していらっしゃいます。輝かしい 50 年の歴史を継承し、次の 50 年にむけてさらに発展していきますよう、皆様のご指導を仰ぎつつ、努力したいと思っております。

私は、1989 年 British Council よりグラントを頂戴しロンドンの Imperial College で学びました。専門的な話になりますが、当時英国で開発されたばかりの共焦点レーザー顕微鏡という、光学顕微鏡、電子顕微鏡につぐ第三世代の顕微鏡とであり、私のライフワークの原点となる、いくつもの成果をあげることができました。この留学体験は私に自信を与えてくれましたが、それ以上に有り難かったのは BCJA との出会いでした。英国大使館でのレセプションに参加させていただいた折り、初対面の私に諸先輩方が気さくにお声をかけてくださり、英国での生活や現在のお仕事などのお話しを通じて、British Council で育った人々の心意気を伝えていただきました。British Councilのおかげで、英国だけでなく、BCJA の人々とも交流ができ、私の人生はたいへん実り多いものとなりました。恩返しをしたい、という気持ちで BCJA のお手伝いをさせていただくことにしましたが、役員

会ではむしろ学ばせていただいていることの方が多い、というのが実感です。

さて、50 年前と異なり、今ではグラントに頼らなくても私費で英国留学できる時代となりました。BC Scholarship/Fellowship も廃止されました。しかし、British Council がもつ力は、金銭だけでなくむしろ精神的側面がたいへん大きく、何らかの形で英国留学をめざす人々のサポートを存続して欲しいと願っています。BCJA では皆様ご存知のように、昨年より奨学金制度を始めました。会員の皆様から浄財を集めておりますが、昨年は駐日代表 Terry Toney さんのお心遣いで British Council からご援助をいただき、10 名もの人々の英国留学を支援することができました。BCJA 奨学金制度は白鳥令先生を委員長とし、西田宏子・橋都浩平・平考臣の各委員により、鋭意、発展への道を検討・実行しています。BCJA の運営は、青柳昌宏副会長兼ニューズレター編集長をはじめ、役員の皆様、そして British Council 秘書の國村三樹さんの献身的なご尽力のおかげでなされています。今後とも British Council を軸とした人の輪が広がっていきますよう、皆様のご指導ご協力をお願いする次第です。本会発展のための、会員の皆様からの貴重なご意見も賜れば幸いです。

（北里大学医学部解剖、Imperial College 1989、segawa@kitasato-u.ac.jp）

—2001 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告—
ケンブリッジ、6 月 16 日

櫻井 文子

今週で、ケンブリッジに来て最初の学年が終わります。来週にはコレッジで May Ball — 一年に一度の夜通しのパーティー — がありますし、その少し後には、学科の「学期が終わったディナー」があります。年度末の試験も終わり、多くの学生にとっては初夏の短い夜を毎夜のように遊んで過ごせる、楽しい季節なのですが、試験もなければ決まった休みもないような博士課程の私は、彼らを羨みつつも、図書館に通っている日々です。とはいえ、パーティーには出かけるつもりですが・・・。

私のいるダーウィン・コレッジは、二十世紀につくられた、

大学院生だけのためのコレッジで、大学に数ある学寮の中では新しい方です。ちなみにコレッジは、学生にとっての「たまり場」のようなものです。寮の用意をするのはコレッジの仕事ですし、食堂があるので食事でもできますが、学生にとっては、人に会いに行く場所です。食事時に行けば誰か必ず知り合いに会えますし、夜になればバーがあります。ダーウィンのバーは、夜中まで開いている（イギリスではパブは皆十一時で閉まりますので、それ以降の時間にお酒が飲める場所は貴重なのです）ことで大学の中で名高いのですが、時には明け方ちかくまで、そこで悪友どもととごろを巻いていることもあります。寂しがり屋の私には、このコレッジのシステムは、とても良くあっているようです。バーではパーティーもよく開かれますが、その時はせまいバーの中は押し合いへし合いになります。

コレッジはケム川の川岸の、町の中心に程近いところにあります。裏庭が川に面しているので、暖かい今の季節はケンブリッジ名物のパンティング（舟遊び）にもってこいの場所です。パントは、この川で舟遊びをするときに使う、平底の五人乗りくらいの簡単な舟です。ゴンドラのように漕ぎ手は立って漕ぐのですが、不器用な初心者は川に落ちこちることがあります。天気の良い日に乗るパントも楽しいですが、真夜中にパーティーが引けた後で乗るパントも楽しいです。大体どこのコレッジも学生のためにパントを所有していますが、ダーウィンにも目下のところ五艘あります。「チャールズ」「ビーグル」など、ダーウィンにゆかりの名前がつけてあります。その内の一艘、「イグアナ」は、私が来た頃にはもう、底に穴が開いていて廃舟同然でしたが、十月末のパーティーの後、酔っぱらった一団が間違えて乗り込んだ時には、あやうく水没するところでした。それでもまだ、なぜか大切につないであります。

私が所属している科学史科学哲学の学科は、町の中心部にある、十九世紀に建てられた小さな建物の中にあります。もとは実験物理学の研究室だった建物をもらいうけたもので、正面の入り口の上には、今も金字で実験物理学研究室と彫ってあります。なんでも立ち入り禁止の地下室には、実験の時にもれた放射能がまだ残っているという、まことしやかな噂話もあります。博士過程の学生は、必修の単位はありませんので、人によっては図書室を使う時と、指導教官に会う時しか学科に現れないこともあります。私は、好奇心も手伝って、講義やセミナーにこまめに出ていました。講義は一時間なので、小気味良いテンポで話が進むため、集中力のない私でも楽しめました。中には、天井ばかりみて学生と目を合わせようとしない、ちょっとシャイな先生もいました。セミナーも、時間を区切ってさっさと進行するのが、時には物足りないこともありましたが、それはそれで慣れると緊張感が楽しめました。セミナーの前に出る、紅茶とビスケットとおしゃべりも、実は魅力の一つでしたが。

リサーチは、ほとんど大学図書館でしています。町の中心から自転車です五分程の、少し離れたところにある図書館の建物は、本当に巨大なものです。姿も色も雰囲気も、どこことなく時計を外した安田講堂に似ていますが、それを二まわりほど大きくしたようなものです。中はまるで迷路のようで、私は一度となく迷子になりました。大半の図書は閉架にあるの

で、各閲覧室から注文して、取り出してきてもらうのですが、そこに辿りつくまでの作業が大変です。蔵書が多すぎるため、書誌情報はほとんどデータベースに入っていないのです。そこでまずデータベースで検索して、記載がない場合は、カタログ室にある、巨大なカタログのページをボタン、ボタンとくって探します。十九世紀のことを研究している私はそれで済むのですが、もっと古い時代やヨーロッパ以外のことを研究している人の場合は、また別に専用のカタログがあるそうです。とはいえ、古いカタログは、意外な発見や収穫があることもあるので、それはそれで歴史家としては、ささやかな楽しみがあります。

夏休みは、史料調査のためにドイツで過ごす予定です。十九世紀のフランクフルトの自然誌協会について研究をしていますので、休暇中は町に住み着いて、毎日のように古文書館に通うことになります。前回の春休みも同じようにして過ごしたのですが、その時は主に自然誌博物館の資料室で古い記録を調べました。図書館として一般に開放している場所ではなかったのが、司書を兼ねている爬虫類学者の方の研究室を使わせてもらいましたが、その部屋で私が使わせてもらったデスクは、瓶詰めになったヘビの標本と、イグアナを飼っている水槽の間に挟まっているという、本当に自然誌的な(!)環境の中での作業でした。今回の訪問では、動物園の資料室も訪れる予定ですので、さらに貴重な体験ができるかもしれません。

(2001年度BCJA奨学生、University of Cambridge, Ph.D in Department of History and Philosophy of Science)

オックスフォードの窓際から

中野 涼子



2001年10月より、矢内原忠雄の研究を、国際関係論という学問の発展史の中で意義を見出すという試みを行っている。矢内原は、戦後に東京大学の学長を務め、無教会基督教信者としても著名な人物である。明治維新以降、西洋の学問や思想は日本社会に急速に普及した。それは単に、箱に入ったものを「輸入」したのではなく、西洋の思想を消化した上で、その時代における日本の社会状況の中で生かそうとする試みがあつたはずだ、というのが私の基本的な考えである。矢内原忠雄もいわゆる知識人として、西洋で育った学問体系を吸収しつつ、その時代の国際機構・国家・個人の各レベルにおいて最善の策を提示しようとした人間であり、そうした姿勢は、今後の国際関係のあり方を考える上でも重要だと思っている。

博士課程への入学ということで、私が参加しなければならぬ講義は限られていて、ほとんどは指導教官との対話によって研究を進めることになった。日本の思想を西洋思想との絡み合いの中で矢内原を理解するという研究の独自性により、中国近代史に詳しいミター博士と、国際関係論や西洋政治思想を専門とするハレル博士の二人から指導を受けている。矢

内原がなぜ移民や植民に注目し、その視点から国際社会のあり方を考えていったのか、社会科学と社会正義の関係を矢内原がどう捉えていたのか、ということを知るためには、まず彼が生きていた時代状況を知らなければならない。そのため、明治時代から昭和にかけての社会・学問状況などを一通り概観し、さらに、日本近辺諸国や西洋諸国との交流について勉強した。また、社会科学研究者と彼(女)らが生み出す文献との関係について考えるために、イギリスで多く見られる「理論」の背後にある「思想」について理解することにも時間を割いた。こうした勉強は現在も進行中であるが、矢内原の思想や研究がいかに普遍的な考えを含み、国際社会における経済的不均衡の問題や市民社会の発展などに関する基本的視点を提供するかについて、この一年に学んだように思う。

また、オックスフォードに来てからというもの、イギリスやヨーロッパ大陸における移民・難民問題について多く耳にするようになった。それに関する討論会などに参加するたびに、日本でこうした議論をいかに生かすことができるのかと考える。日本が受け入れる移民・難民の数は、ヨーロッパ諸国に比べて圧倒的に少ない。しかし、日本人とみなされない人々に対してどのような態度を示すべきかという議論は、年々多く行われてきているように思う。その場合、差異感に基づく「ウチ」と「ソト」の意識がどう形成されるのか、あるいはされるべきなのか、ということも争点になる筈だが、日本の場合はそのような議論以前に、国外での反応が問題にされることが多くある。このことは憲法や軍事・経済的援助についても言えるのであり、外圧によって動くという日本のイメージは今も払拭されていないようだ。しかし、重要なのは言うまでもなく、個人がどういう視点に基づいて決断をくださるかということである。例えば、移民・難民の受入れ人数を増やすとするなら、外交的手段としてなのか人道的理由に基づいて行うのか、社会的な受入れ体制はどうしていくべきなのか、といった根本的な問題について、各個人が考える必要があるだろう。政策決定者だけではなく、日本という国に住む人々が考えるという主体性が、重要なのである。そうした内容について考えさせる社会環境や教育が、はたして今の日本にあるのだろうか。移民の多いイギリスで生活をし、そこでの移民・難民問題の活発な討論会などに参加すると、そうしたことに思いを馳せざるを得ない。

とはいえ、移民問題に大きく関心を持つようになった理由は他にもある。オックスフォードが人種のるつぼと言えるほど、世界から人々が集まっているからだ。特に大学院生は、英国人が多くを占める大学生に比べて、世界各国からの学生に触れる機会が多い。イギリスではどこの大学でもそうかもしれないが、オックスフォードでは特にその割合が高いようだ。私の所属する国際関係学の学部においても、他大学から博士課程に入ったのは11人のうち、一人のみが英国出身であった。しかも、二人のカナダ人を除いて、学生たちの国籍は異なっているのである。私の所属するセント・ヒューズ・カレッジも、各国から学生が集まっている。したがって、自ずと会話は各国各社会の習慣の違いなどがメインとなり、毎週行われるフォーマル・ディナーでも、各自の出身地域について話すことが多い。この場合、イタリアやドイツといった出身「国」ではなく、ロンバルディアやバーバリアなどの「地

域」が話題となるのは、それだけ彼らが地域の特殊性を意識し、尊重していることの表れであろう。

カレッジは、中心部から少し離れた閑静な場所にあり、芝生の敷地はかなり広い。太陽が照っている日には学生たちが日向ぼっこをしたり、サッカーを楽しんだりして、私はそんな光景を寄宿舍の窓から眺めながら、研究を進めている。もともとはワーズワスの従姉妹にあたるエリザベスが、女性の教育を推進することを目的に創立したカレッジだったが、現在は男女共同で、クリケットやサッカーを混合で楽しんでいる。私自身は、社交ダンス、サルサなどのレッスンに毎週一回通い、基本的なものをマスターすることができた。また、イギリス元外相であるロビン・クックや、ロバート・アルトマン監督、在英パレスティナ自治政府代表や、EU 難民事務局代表など、興味深い著名人たちの講演を聴くことができたのも、大きな収穫であった。このようなすばらしい機会を得ることができたのは、まさしく人生の宝だと思う。私はかつて、短大でドラマを学び、四年大学に編入、専門を変更しての大学院進学と、予期しない道を忙しく生きてきた。しかし、今回暫く腰を据えて研究活動を行うのがオックスフォードの地であることを、心より嬉しく思う。この最初の一年目という重要な時期に、BCJA から奨学金をいただいたことは、財政的な助けになったと同時に、大きな励みであった。ありがとうございました。

(2001 年度 BCJA 奨学生、University of Oxford , MSc International Politics Studies)

「BCJA の本」の次第

西田 宏子

平成11年に、英国留学の思い出や情報をまとめた本を出版いたしました。これは、BCJA の会員を英国留学の同窓会員であることを、強く意識して頂く機会となること、将来留学を希望している若い方達への体験談として、読んでほしいとの思いを込めたものでした。

出版してからは、「少しタイトルが意味不明すぎた」とか、「もっとインパクトのある装丁だと良かった」などの御意見を頂きましたが、初年度には、ある程度売ることができました。それから、なかなか在庫が減らず、出版社から残部を引き取った平会長が置き場に困るとのことで、私が美術館の隅に置けると考え、お引き受けいたしました。ところが届いたのは大量の本で、隅ではなく一区画を占領してしまいました。

何度か、ニューズ・レターにも販売中であることを掲載し、AGM でも販売促進に努めて参りましたが、はかばかしくありませんでした。平成13年度の終りに際しまして、これ以上長期にわたって在庫にすると、本が悪くなることを役員会で報告しましたところ、British Council で送料を御負担頂けるとのことで、送り先のリストも頂戴することとなりました。その名簿に従って、急遽北海道や四国、沖縄など、遠隔地の大学116校へ、各6冊づつ贈呈することにいたしました。3月30日に全て送付し、ここに「BCJA の本」は、すべて然るべき場を得たことになりました。

ここに至まで、多くの方々に御協力頂き、有難く存じております。BC の Toney 氏の御好意にも、深く感謝する次第です。そこで、この本の販売代金から諸々の送料などを差し引いた 81,357 円を、役員会で BCJA 奨学金に加えることといたしました。ここに御報告申し上げ、重ねて皆様の御協力に感謝いたします。

(西田宏子、Nishida Hiroko, 根津美術館、nishida@nezu-muse.or.jp)

BCJAホームページについて

編集部

前回のニュースレターで予告いたしましたように、BCJA のホームページを開設いたしました。URL は、<http://www1.accsnet.ne.jp/~aoyagi/> となっております。ぜひ一度ご覧下さい。

過去のニュースレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内、掲示板などがご覧になれます。なお、一部の機能は、準備に時間がかかっており、もうしばらくお待ち下さい。それから、BCJA 英国留学奨学金の募集に際しては、British Council のご好意により、UK NOW、British Council の Top ページからの Link を時限で設定させていただきました。

今後、さらに内容を充実させて行きたいと考えておりますので、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せいただければ幸いです。(メールアドレス m-aoyagi@aist.go.jp まで)

British Council の Alumni site のご紹介

British Council では、英国留学した人たちの交流の場となるよう Alumni site の立ち上げを準備しているそうです。いろいろな検索や情報交換が可能となるようです。URL は、<http://www.keepintouchuk.net> となっております。

[編集後記]

前回の編集後記で編集長の交代について、ご案内したところですが、西田宏子先生のご都合により、急遽、編集事務を担当しておりました青柳が編集長を引き受けることになりました。このような事情によりまして、発刊が予定より遅れることになってしまい、大変申し訳ありません。今後は、可能な限り定期の発刊をキープしていきたいと考えております。BCJA 英国留学奨学金につきましては、応募が終了して、今年度の審査が進められているところですが、昨年度の奨学金を授与された方々からの近況報告が届いておりますので、本号に 2 件を掲載させていただきました。残りの方については、次号以降に掲載を予定しております。このような記事が、BCJA 英国留学奨学金制度に対するご理解を深めるのに役立つ幸いです。

本レターをますます充実させたいと思っているところですが、そのためには、皆さまからの積極的な寄稿が不可欠です。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。なお、本ニュースレターについては、前回に引き続き BC の國村三樹さんに発送をご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(青柳昌宏、独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95, m-aoyagi@aist.go.jp)